
****冬に出会う不思議な恋.****

春風ななこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＊＊冬に出会う不思議な恋．＊＊

【Nコード】

N3047A

【作者名】

春風ななこ

【あらすじ】

このお話は、恋愛はもちろん、友情も入った、作品集です。みんなが読める、感動の恋話集。

1 + サンタ・クロースからのプレゼント（前書き）

さえない。と、いうか、積極的に行けないイケメンの主人公。毎年送る寂しいクリスマス。さてどうなる今年こそ・・・！！

1 + サンタ・クロースからのプレゼント

今年もやってきた。この全世界を探しても、きっと俺以上にこのクリスマスに寂しく過ごす奴はいないだろう。だからと言って、好きな奴がいなわけじゃねえ。同じ大学に通う、東城友紀乃。学園一の美人だ。毎年毎年、俺はいつものケーキショップでサンタの着ぐるみを着て、寒さにたえながら『いらっしやーい』なんて言っている。この気ぐるみを着てたら、よく同年代らしき可愛いコに、抱き着かれて、『きやーっかわいいー、サンタさん、写メ撮ろー。』と、言われるのだが、中身に入っている本当の姿を見たらどうなるんだろ……。明日はクリスマスイヴ。日本人は、本命のクリスマスより、イヴの方を大切にするらしい。

「こんにちはー。」

ケーキショップにまた来て、サンタになる。

「よう。サンタ。今日はやっぱりくる人少ないねー。25日まで、休暇撮る女の子がいっぱいでさあこっちは店の売り上げが目まぐるしいって言うのにね。」

「は、はあ。」

日本語の表現がちよいとおかしいこの店の店長が言う。確かに、毎年このくる度に思うのだが、パティシエの女の子以外はほとんど休んでしまう。ただでさえ俺がサンタの格好なんてしなくとも売れる人気のケーキショップで、大変だと言うのに、彼氏や友人のためにこの3日間をすんなり休むなんぞ、なんたる事か！と、思う。そんなふうにもた今日も忙しく過ごしていた。夕方の一山を超えたら休憩をする。30分程だが、疲れて爆睡する。20分後に目を覚まし、少し動いてから、またサンタになる。でも今日は、疲れのせいか、眠気がなかなかとれない。しかし、表に出て、客を集めていると、思わぬ事が目に飛び込んできた。

「と……っ……東城 友紀乃……！」

小さい声をあげた。そして、一気に目が覚めた。彼女は、泣いていた。そして、サンタの俺を見て、走り去って行った。まるで、中身の俺を見る様に。澄んだ瞳で、睨んだ感じ。でも、強くて、とても哀しい瞳だった。

別に、俺は自分で言うのもなんだが、不細工ではない。イケメンサイドで、馬鹿ではない。まあ、大学が、東X大学と、言う時点で分かるが。しかし、魅力と積極性がないようだ。仕方ないだろう。この世で一番苦手なのは、女なんだから。しかし、それにしても、今日の東城の顔は忘れられない。俺は、ベットの中で、彼女が何故泣き、何故俺を見たのか、問った。

「ま、サンタの格好だったからな。」

俺は、悲しく開き直って、寝てしまった。

サントサントサント（前書き）

東城さんの泣いている理由がよく分からないまま、なんか、意外な展開に！どうなる、俺！

サントサントサント

次の日、奇跡の様な事が起こった。俺は、いつもの様に、友達と学食に行こうとした。しかし、学校中が、クリスマススムードで意気だっている。なので、

「わりいな。今日は、彼女と飯食うんで。ヨロシク。」

「え。」

「おっと、今年は食べる相手いるんで。」

「ええ．．．。」

次から次にみんなが去ってゆく。そして、仕方なく弁当を買ってきて、教室の席に着いた。すると、なんと、この教室をよく見てみよう！俺の他に、独りの奴がいる！！それも、あの、東城だ．．．！！！！！！

そういえば、彼女は、友達がいらないわけではないが、特定の人はあまり付き合っていない。でも、あの美貌の持ち主と言うのに、彼女一人いないとは．．．なんたることかっ！

「いや、待てよ。」

ちよつと遅れて迎えにくるかもしれない。っでも、っでも。話し掛けたい。でも、でも．．．

．．．だあああああ！！！！！！

「よし。」

俺は、静かに立ち上がり、息を整え、自然に自然に、ものすごく自然に話し掛けた。

「東城、さん。隣いい？」

チツ、噛んだ．．．。東城は、少しためらい、うなづくと、少し端に避けた。なんだか、大人しい彼女のせいか、昨日見た表情が妙に重なる。まあ、仕方ないか。多分、今日もまた昨日の事を引きずっているであろう。でも、何があっただ？気になった。でも、ここは、まだ慎重に。。。

「じゃあさ、バイトが終わったら、『ローズ・ホテル』に来て。場所、分かる？」

「え、お、う、あ、う、うん。」

俺は、いやらしい方向を次々に脳裏に巡らせていた。今日の帰りに薬局で（マツキヨ）コ×××ム買わなきゃ……。しばらく、勉強についての雑談をしたあと、メアドを交換して別れた。

午後9：30 12月24日『ベリー・ローズ』のホテル前。多分、『ローズ・ホテル』とは、ここのことだろう。町は、クリスマスで、いつそう盛り上がっていた。俺は、サンタの格好の頭の部分以外下がそのまんまで、やってきた。町のカップルを引き離しながらここへ来る途中、恥ずかしさはなかった。東城の事、それだけで頭がいっぱいだった。まあ、この季節だし、このイベント中だし、この格好で歩いても珍しいだけで、怪しまれはしないだろうからな。そして……

「ごめんなさい、待たせた？」

俺は、首を横に振った。

「そう。ならいいけど、クリスマス空いてるから、手伝ってくれるかなと思って。ごめんね。ホテルなんか呼び出しちゃったから。」
え？どうゆう事なの？

「今夜は、大変だわ。港周辺の子供達の担当なの。さ、いきましょ。あ、それに、丁度良かった。その格好で来てくれて嬉しい。」

「え。待つて。何？なんなの？？」

「あ。いつけない。言い忘れてた。私は、サンタクロース。さあ、プレゼントを配りましょ。」

まってくれ！予想外すぎるぞおおおおおおお！！！！

おくりもの(前書き)

本当は、恋愛のストーリー。『俺』は、ついに、サンタを手に入れる！

おくりもの

そして、わけの分からぬまま、真っ赤な車に乗せられた。ピカピカ光る、きれいなオーブンカー。ドアの中央に、白のラインが入っている。結構高級な車だ。反射的に、乗ると、シートベルトをして、上着を整えた。足下は、寒くはないが、上半身が冷たい風に刺さる。「出発。シートベルト、した？」

「おう。」

変なエンジンがかかる。すると、暖房も同時にかかった。そして、なんと、次の瞬間、車が空高くあがった！！

「うあああああああ！！」
思わず絶叫。

「あ、あの、こえ、あんまりださないでね。」

「は、はい。」

俺は、町にいるカップルに薬局で買ったコ×××ムを投げ付けた。マツキヨ
あたりはしなかったが、まあ、いいだろう。しかし、本当に信じられない。どんどん町を過ぎ、港周辺に来た。高層マンションが幾つか並んでいる。

「これを見て。」

東城は、地図を差し出した。色々なマンションの地図だ。

「このマンションに、個数が書いてるの。配るプレゼントのね。そして、マンションの名前が、プレゼント一つ一つに書かれているから、屋上についたら、そのマンションの名前を書いたプレゼントだけを出して、個数を確認して。」

「え。はい。」

「そのあとは、プレゼントが勝手に願う持ち主のところへ行くわ。」

「えーっ。」

「よし、始めようか！」

東城は、袋を俺に渡し、地図もついでに渡して、ある高層マンション

ンの屋上に降ろした。置き終わったら、連絡してね。と言い、彼女は、隣のマンションに行った。

「えー、ここは、パークユーズ。1番館。」

袋の中に手を入れる。結構至難の業だった。一応、見つけやすい様にと、色でわけてある感じはするが、なかなか見つからない。大小様々なもので、もちろん、堅さが一定と言っわけじゃない。ぬいぐるみらしき物もあれば、箱に入った物もあるし、なんじゃこりゃ！？と叫びたくなる様な感触もあった。まあ、動物はいなさそうだが、変に箱が揺れ、なかから、子犬が鳴いていたりした。かわいそうに。持ち主が目覚めますまで、待っていなきゃなんのか。

「これくらいかな。配り忘れはないか。」

もう一度確認して、まだあった、と、また袋を探っていると、もう白い袋をぺったんこにした東城が迎えにきた。

「やっぱり初めての仕事は、きついね。」

と、言い手伝う様子を全く見せずに、さっさと次の袋を手前に出す。

「よし。」

「いい？次行こう。」

俺は、急いでまた車に乗る。俺の袋には、まだあと2塔分のプレゼントが入っていた。車が離れるとき、俺は、またまた信じられない光景を目の当たりにした。プレゼントが、光って、消えたのだ。きつと、『願う持ち主』の所へ行っただろう。

「あのさ、こうゆうプレゼントって、誰が用意するの？」

俺は、素朴な質問をした。だって、東城が全部買っなんて、経済的に無理だろう。

「ん？えっとね、このサンタの洋服の色は、会社のイメージカラーなの。」

「赤と白？」

なんだろうと首を傾げた。（ここ以降、実話）

「正解は、コカ・コーラ。うちの会社がやってるんだよ。サンタのはじまりは、ずーっと昔。ある絵本に登場した、黒と緑の小人がは

じまりなんだ。まあ、モデルは、知ってる人も多いと思うけど、ニコラスって言うお金持ちの優しいおじいさんが、ある貧しい家族の家の靴下に金貨を入れたのが元になってるんだけど。」

「へ、へえー。」

「そこで、ある日、コカ・コーラ社が、こんな小人じゃ、親しみにくいだろうと言う事で、人と同じ大きさに実現。そして、洋服は、我が社のイメージカラーにつて。（ここまでは実話）そして、伝説だけじゃあ、なんだから、この有り余る経済力を、世界の子供達へ。と、言うわけ。」

俺は、かなり納得。

「じゃあさ、まてよ、この車って・・・。」

「そう。世紀の大発明！！飛ぶ車！でも、これ売りに出しちゃうと、私達の正体がばれるし、犯罪にもなり兼ねない。騒音もかなり下げた究極の車だよ。最初は、まあ、爆発音がうるさくってたまになかったけどね。」

「へ、へえー。」

ただ、ただ、うなずくだけだった。最後に、ここ周辺のプレゼントを配りまくった。2回目の配達は、まだ慣れていなかったが、3回目、さっきと量が多いのに関わらず、結構早くに配り終えた。やっと終わった！と、思いきや、しばらくして、やけに荷物を積み過ぎた大きな車がやってきて、その半分を、東城の車に乗せた。まだか。と、俺はがつくりとひざをついた。

「よし、次は、あの地区だよ。」

さっき配った所とあまり離れてはいない場所だった。でも、今度は、大変。普通の高級マンションならまだしも、一軒屋も混じっている、一般的な住宅地だった。今度はさっきよりも疲れた。一軒の家に、プレゼントを何個も置いてゆくならまだ軽い。少子化？はあ？一軒に一つ、二つ・・・ざっけんなこのヤロー！！！！お笑い芸人の魔になりつつ、仕事を進めた。時々、屋根から『サンタさんありがとう またらいねんもきてね』と、非常に読みにくい字でか

かれたお礼の手紙や、チョコやクッキー、あるいはケーキやワインなどのお酒もプレゼントが消えると同時にやってくる事もあった。まだお礼の物を置いてなかった分は、明日に、届くらしい（東城情報。）

「さて、終わりました。いてて。」

仕事が済んだのは、午前26時。東城は、俺の2〜3倍の配達をした。

「お疲れ。」

「お疲れ様。」

俺が声をかけると、丁寧な言葉で返してきた。おっと、いい忘れていたが、屋根から屋根に移る際は、『飛ぶブーツ』で簡単に移れた。それと、プレゼントが消えたり、あらわれたりする現象は、不明。

（苦笑。）

「なんか、買ってこようか？」

「うん。暖かいのがいい。」

「了解。」

俺は、ポケットから財布を出し、ココアとコーヒーを買った。

「どうぞ。」

「ありがとう。」

ちよつとへんな状態で止まっている赤のオープンカーを除けば、普通の公園に、仲良くベンチに座るカップルだった。夕方からちらつく雪が、さつきから静かに、本格的に降り始めた。

「あのさ、ここで聞くのは、なんだけどさ、なんで、昨日・・・。」

「ああ、泣いていた理由？気にしないで。『サンタ』の仕事で、毎年彼に会えないの。そしたら・・・。振られちゃった。」

彼女は、寂しそうに笑った。それが、なぜかもっと胸にキュンときて、抱き締めたかった。そうだ、俺、本当は、こいつの事が好きで、今日のあの昼までは、話す事もかなり困難だった。でも、今は、彼女を『サンタ』として、見ていて、でも、ふとその見方から外れると、何故か、こんなにも・・・。

「あ。そうだ。」

東城は、言った。

「まだ、君にプレゼントしてなかったね。」

東城は、真っ直ぐ見つめた。この俺を……。だめだ。我慢できない……。！！

「サンタ・クロース！俺は、貴方の事が、好きだ！！」

本名じゃなく、何故か、この名前でいきなり告ってしまった！！！！
！相手もびっくり。

「私は、まだ、彼と別れたばかりだから、今は、何も……。だから……。その……。」

やっぱり、言うんじゃなかったと、気持ちを抑えきれなかった自分を悔やんだ。

「毎年、この季節だけ、私が、サンタクロースからのおくりものとして、貴方と付き合うなら……。それなら……。いいかも。」

俺は、言葉を繰り返した。

「サンタ・クロースからのおくりもの……。」

翌朝、今年は、ドタキャンでバイトを休み、東城と出かけた。初めて予定のつまった日だった。それから、俺は、彼女がいない物の、クリスマスは、子供へのプレゼントを片手に、町を飛び回り、サンタ・クロースとともに、この日を送る。

そして、今年も……。

夢を壊す様な言い方かもしれないが、クリスマスの夜、鈴の音と、あのエンジン音が聞こえてこないか？まるで、爆発するみたい……。それは、きっと俺達だ。毎年自分の割り当てられた仕事をする。サンタは、各地にいる。みんな、赤いオープンカーを飛ばしてがんばっているんだ。

では。また。***メリークリスマス***

おくりもの（後書き）

このお話は、恋愛ものにつなげるのに苦労しました。でも、良く考えてみて下さい。サンタ・クロースの女の子が、彼女って、ロマンチックですね。

わたしも、サンタ・クロースが彼氏だったらな〜。

2 + 前世の記憶に。(前書き)

今度は、運命を感じるスーパーラブストーリー。ファンタジックなお話ですが、何故か、そこが重要になってくる。

2 + 前世の記憶に。

ソウル・メイト。貴方は、この言葉を知っているであろうか？これは、前世からずっと結ばれているいわば、『運命の赤い糸』の様なもの。このタイプは三つあり、『殺しに来る者』『助ける者』『真の恋人』が、居る。貴方は、この物語を読んで、幼い自分を、もっともって大人に出来るはず。

秀學館高等学校。2ーJ。私は、寒い冬空を眺めながら、数学の宿題をとつと終わらせていた。おっと、遅れました。私は、山名唯。いつも冬になると、鬱々してしまう。何故だか知らないが、毎年、毎年、鬱々するのだ。今年は、最高に鬱々している。それから鬱々するのは、毎度の事なのだが、その気持ちと同時に、不思議な気持ちになる。その感覚が、今年は、もっともとはつきりしている。今年は、何故だろう？

「ゆい、ゆい、ゆーいっ！！」

友達が、呼んでいるのに、遅れて反応する。

「ん？」

「あのさ、ここ、分からないんだけど。」

「どれどれ。」

別に、成績は良くないのだが、理解をしているので、教えられない事はない。しかし、今は、6限目の自習中。ちよつとの音でも、この教室に響く。強烈な受験戦争に勝ち抜いてきた者がこの学校にいる。偏差値が、当たり前前に60以上じゃないと受からない。そんな人達だから、集中力が物凄いらしくて、こうやって、教えていると。。。

「そこ、自習は、自分でやるモノでしょ？自分で考えなさい。山名さんも、簡単に教えないの！」

「はあい。」

学級長が注意をした。

「チツ。自分で考えても無理だから、聞いてるんじゃない。サイアク。」

小声で、ブーイングして、また元に戻る。それを何度か繰り返して行くと、あつという間に自習が終わる。

今日は、補習もなく、すんなり帰れた。いつも友達と寄り道して帰って行く様な事はしない。私は、一人でいる時間が好き。だから、今日も、こつやって本屋に立ち寄る。ここは、大きなビルで、1階から5階まで、全て本で埋め尽くされた、オシャレな本屋。いつもの様に、立ち読みにかかる。

「まだ読みかけなのよね。どうしよう、買っちゃおうかな。」

私は、立ち読みをし尽くして、『面白い』と思った物だけを買って家に帰って3回は読む。今日は、何となく気分が乗らなかった。3分で1ページのペースも、何故か、今日は・・・

「やーめた。帰ろう。」

私は、本を棚に戻した。変な気分。やっぱり、今日はテンションひつくないなあ。

私は、商店街を通った。すると、人混みをかきわけて、一人の男子が走ってくる。多分、高校は違うが、同じ高校生だろう。（制服着てたから。）チャリン・・・

「あ。」

私の、髪留めが、地面に落ちた。それを拾い、立ち上がった瞬間・・・

「うあつ。」

「ああつ！」

ドンと、音がして、彼とぶつかった。地面に落ちる私。

「すみまない。」

とつさに彼が謝ってきた。私は、制服の土を払った。変なモノを見る様な目線で、人々が、一瞬止まって、過ぎて行った。

「こちらこそ、すみま．．．」

私は、一瞬息を呑んだ。驚いたからだ。普通、恋愛のパターンで行けば、『カッコイイ』と思ったり、『ドキッ．．．』などと感想をもらうのだが、まあ、『ドキッ』とはしたが、違う意味だ。走って来たのは見えたものの、誰か、なんて確認できていない。そのぶつかった相手は、中学時代の先輩。ちなみに、仲が、悪かった。今更だが、『謝るんじゃないかった!』と、思った。

「久しぶり。」

「お久しぶりです。」

それだけ言って、過ぎ去ろうとした瞬間、さつと腕を捕まえられて、軽く引き戻された。

「なんででしょう?」(やや睨みながら)

「あのさ、今日、これからヒマ?」

確かに、予定がなくなってもものすんごくヒマなんです、嘘について、いいえ。これから用事があるんですけど。」

と、なるべく声を荒立てない様にしながら答えた。すると、相手はあきらめると、おもいきや、

「来い。勝手だが、お前しか、今つれる奴がおらんのだ。」

と、一言。

「え?はあ?えちよつと。にゃああああ!!!!!!」

そのまま腕を掴まれたまま走った。店と人が線の様に見える。

「は、離して下さい!」

私は、腕を振って抵抗するのだが、さすがに強い。止まろうとしても、自然に足が動いて、どんどんどん、前に前に進んでゆく．．

。そして、人が全くいない脇道に入り、その止めてあった車のドアが、タイミング良く開く。そして、私は押し込められて、そのまま車が発進。今、私の脳裏をよぎるのは、『犯罪?!』『誘拐!?

』『殺人?!』『拉致られたあ!?!?』．．．

「大人しくしとけば、何もしない。」

「もうしてるじゃないですか!!!!!!」

私は、押さえる手を振払って、運転手を殴ろうとしたが、もっと強く引き戻された。

「大丈夫、落ち着け。」

厳しい表情で私を見つめる。車の後部座席で私は下、先輩が上と言う状態で言われた。足で思いつき蹴りあげようとしたら、さっと押さえられた。

「話だけ聞きますから、普通に座らせて下さい。」

なんか、妙なドキドキ感に襲われて、体制を普通にしろと言った。すると、すんなり退いてもらえた。

「えー、まず、俺がやってる事はなんなのか言う。」

心の中で『犯罪。』と言う。

「元に戻る方法だ。」

心の中で『はあ?』と言う。

「普通の人間になる方法。わかんねえよな?」

心の中で『もちろん分かりません。早く降ろせよ、ゴルア(怒)』と言う。

「なんとか言えよ。」

「わかりません。全く、ぜんぜん。」(不満げに)

軽く舌を鳴らすと、相手も不満を持った様に答えた。

「こうなってしまうからだ。」

そういった瞬間、目の前に起こった事が、信じられなかった。ヒトではなく、彼は、ライオンになっていた。今にも私の喉を引きちぎる様に口を大きく開けて、私の頭に顔を近付けた。

「うああ。。。」

小さく私は、声を上げて、顔を強張らせた。すると、ふっとライオンが歪み、いつものヒトに戻っていた。

「こうなるんで。戻して頂きたい。」

「...はい...」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3047a/>

冬に出会う不思議な恋.

2010年10月9日06時04分発行